

特別支援学校における音楽授業の研究（1）

－音楽療法と音楽中心主義音楽療法－

福間友香*・高橋雅子

A study of the music classes at Schools for Special Needs Education (1)

－Music therapy and Music-centered music therapy－

FUKUMA Yuka and TAKAHASHI Masako

(Received September 28, 2012)

はじめに

筆者は「特別支援教育における音楽科の実際」というテーマのもと、卒業論文を執筆した。その際、特別支援学校における音楽の授業について言及し、音楽技能の習得が目標とされていないことに疑問を感じた。実際の授業では、子ども一人ひとりの障害の程度による段階と発達に配慮した支援を計画し、単に各教科の知識を与えるだけでなく、その各教科の授業で習得した知識が子どもたちの生活の場でどう役に立つのかを考えて指導をしている。しかし、それでは音楽の授業を行っても音楽科授業とは認識されず、音楽あそびの段階にとどまっている。

筆者は、音楽技能の習得を目指しながら子どもたちの生活の質の向上を図る音楽科の授業こそが特別支援学校で行われるべきであり、そのためには「音楽中心主義音楽療法」が有効であると考えている。

本論文は、音楽療法の定義を分類した上で、「音楽中心主義音楽療法」の理論とその位置づけを明らかにしていく。さらに、その理論を音楽科の授業にどのように適用できるか言及したい。

1 音楽療法の定義と分類

音楽療法についての定義は様々存在し、厳密には定まっていないのが現状である。ここでは、音楽療法を定義することがなぜ難しいか述べた上で、様々な定義を分類するための基準と領域について論じていく。

1-1 音楽療法を定義するには

『音楽教育事典』においては、音楽療法の定義について次のように示されている。

一般的に音楽療法は音楽による心理療法の1つといえる。しかし、このように大まかに定義すると音楽療法を一方で病気の治療という医療の領域に限定する意味をもつが、他方では、治療という範囲に留まらず治療を必要とするその個人の生活全体のゆがみを癒すことの意味もある。また、個人の成長、発達に寄与することも音楽療法の目的としてあげられる。これらの点を考慮して定義する必要がある。

このように、音楽療法には様々な側面がある。「治療」に限定するのか、それを医療的・教育的・

* 山口県萩市立明倫小学校

癒しなどにも広げるか、その人の使用方法や認識でその定義が変化してしまうのである。

丸山¹ (2002) は、音楽療法を定義する難しさについて以下のように述べている。(p.31)

音楽療法の定義は、それだけで1冊の本になるほど深く難しい問題です。いろいろな人によっていろいろな立場から定義することが可能だからです。

梅田² (2008) も、音楽療法の定義について、「音楽療法の定義は、音楽療法士の数だけ存在する。非常に多様なものである (p.25)」としている。

このように様々な考え方があつたため、狭義では音楽を何らかの「治療」のための手段として用いる医療の一部と言うことも可能だが、通常は、もっと広く保健福祉や教育的な場面で行われる活動までも含めて「音楽療法」と捉えられているのであろう。

一方、音楽療法を定義することの難しさは、「音楽」と「治療(療法)」という二つの領域の関係に見いだすこともできる。

デイビスWilliam B. Davis (1997) は、音楽療法を定義することの難しさについて以下のように述べている。(p.5)

音楽療法の意味づけは、人により一定しない面があり、音楽療法士の持つ価値観、治療理論、教育訓練、臨床現場、臨床経験によって微妙に異なっている。音楽療法士の数だけその定義が存在するといっても過言ではない。

音楽療法を定義することの困難さは、音楽療法の世界の持つ本質からきている。つまり、音楽と治療という二つの世界を中心に、多様な領域から関係していることによる。

ブルーシア³Bruscia, K. E. (2008) は、音楽療法を定義づける難しさの側面として、「音楽」と「療法」の領域の結合にあるとしている。(p.7)

音楽療法の定義は、多くの療法士が個人で自分自身の定義を組み立てているし、また国外の音楽療法の協会のほとんどすべてが、その協会員の概念や実践を反映してその国の公的定義というものを考案している。(中略)

音楽療法とは本当に定義することが難しく、しかもそうさせるようなたくさんの側面を持っている。知識と実践の相対としてみると、音楽療法は2つの領域、音楽と療法の学際的混合種であるが、この双方ともが不明な境界線の中にあつて、それ自体定義するのが難しいものである。音楽と療法が結合したものとしてみた場合、それは芸術であり、科学であり、人間関係のプロセスであつて、これらが全て同時に起こる。治療様式としてみた場合には、その適用、目的、方法論、理論的志向性は信じがたいほど多様である。

つまり、彼は音楽療法には芸術的・科学的な側面があると同時に目的や方法や理論的背景にも多様性があること、さらには人間関係のプロセスなどのさまざまな要因を含むことに起因する音楽療法の定義の難しさに言及しているのである。

1-2 音楽療法の定義の基準と領域

音楽療法の目標は、性質上治療的なものを中心であるが、音楽療法のモデルはそれぞれ哲学的な違いがあるとされる。

¹丸山忠璋 (1943年-) 武蔵野音楽大学教授。日本音楽教育学会常任理事等を歴任。

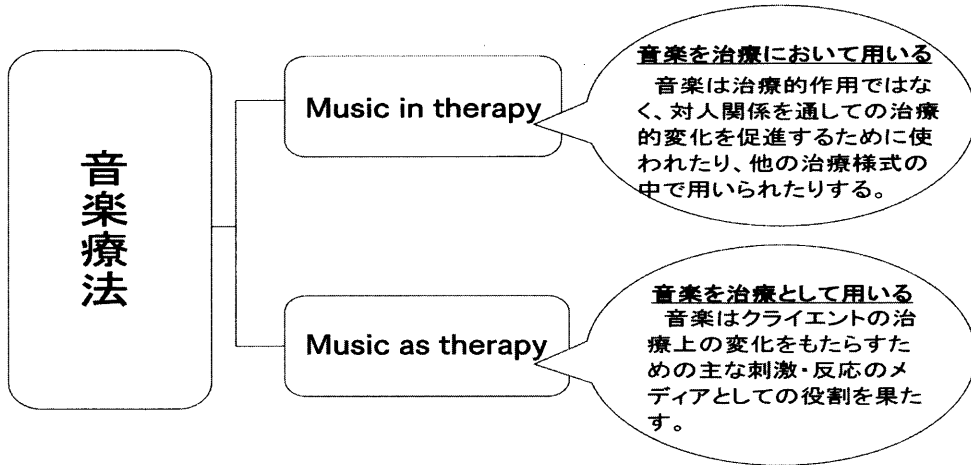
²梅田裕子 大阪音楽大学で音楽療法の講義を行っている。病院内で子どもを対象に遊びのボランティアを行っている。

³ケネス・E・ブルーシアは、1976年よりTemple University音楽療法科教授。実践面では、Brunswick Psychiatric CenterやWoodhaven Center for Retarded Peopleなどの音楽療法士を経て、現在はGIM個人実践などを行っている。前アメリカ音楽療法協会会長 (1974年-83年)。

ブルーシア（2008）は、音楽療法のモデルを次のように分類している。（p.12）

音楽療法のモデルにはそれぞれ哲学的な違いがある。この違いの中心となっているのは、音楽が「治療において（in therapy）」用いられているか、あるいは「治療として（as therapy）」用いられているかである。

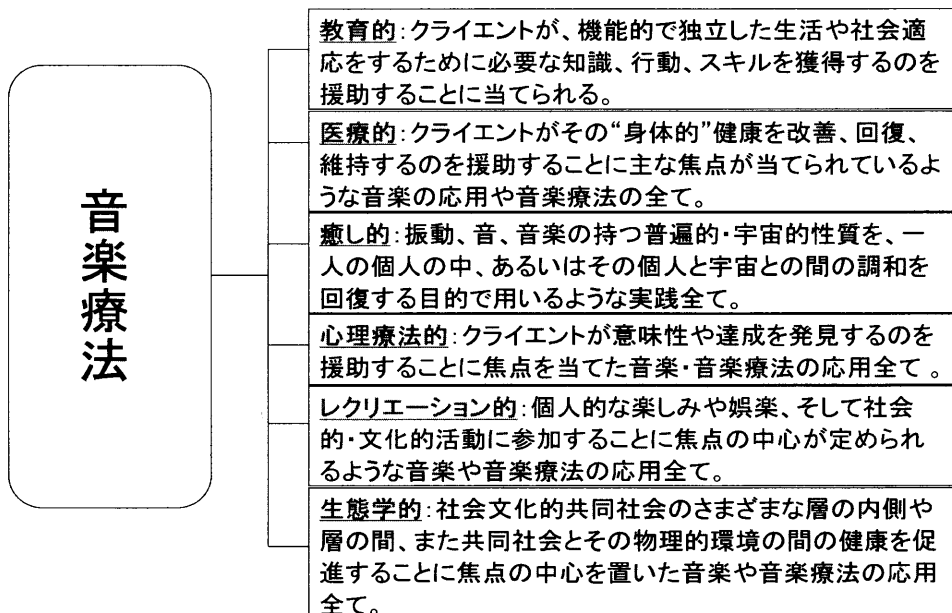
Music in therapyとMusic as therapyの特徴を、以下の図1に示す。



【図1】ブルーシアによる音楽療法の哲学的分類

ブルーシアは、数ある音楽療法の定義についてこのように哲学的分類を行った上で、さらに細かく領域別分類も行った。

ブルーシア（2008）は、音楽療法の6つの主要な領域（教育的、医療的、癒しの、心理療法的、レクリエーション的、生態学的）を明らかにした。（p.168）



【図2】ブルーシアによる音楽療法の領域別分類

【表1】実践の領域とレベル

	補助的	増大的	集中的	主要的
教育的	特殊音楽教育 発達音楽 適応音楽教授 療法的音楽教授 機能的音楽 音楽療法デモンストレーション 音楽療法コンサルテーションとロールプレイ	特殊教育における音楽 特殊教育における芸術 教授音楽療法 行動主義的音楽療法 音楽活動的療法 表現活動的療法 経験的音楽療法訓練	発達の音楽療法 教授音楽心理療法 スーパービジョンの音楽心理療法	他の集中的レベルの領域との組み合わせ
医療的	療法的音楽 音楽療法コンサルテーション	医療における音楽 緩和ケアにおける音楽	医療としての音楽 音楽療法と医療 芸術療法と医療 リハビリテーション的音楽療法 緩和的音楽療法	他の集中的レベルの領域との組み合わせ
癒しの	音による癒し	音楽による癒し	癒しにおける音楽療法	他の集中的レベルの領域との組み合わせ
心理療法的	心理療法的音楽	支持的心理療法 司牧的カウンセリングにおける音楽	洞察音楽心理療法 変容音楽心理療法 芸術心理療法における音楽 表現的心理療法 教授音楽心理療法 スーパービジョンの音楽心理療法	他の集中的レベルの領域との組み合わせ
レクリエーション的	療法的音楽レクリエーション	レクリエーション的音楽療法 療法的音楽遊び	音楽と遊戯療法	他の集中的レベルの領域との組み合わせ
生態学的	機能的音楽 儀式的音楽 霊感を与える音楽 ミュージック・セラピー・アクティビズム	アーツ・アウトリーチ・プログラム 組織音楽療法 癒しの音楽儀式 感性化トレーニングにおける音楽療法	家族音楽療法 共同社会音楽療法	他の集中的レベルの領域との組み合わせ

ブルーシア (2008) 『音楽療法を定義する』 pp.183-184より抜粋

2 音楽中心主義音楽療法

2-1 音楽中心主義理論とその背景

林 (2008) によると、音楽療法の理論は、これまでに他の学問領域から借りてきていることが多いとされている。例としては、神経学的科学、精神分析学、行動学習理論などである (p.153)。

これらの音楽療法は、いずれも音楽をひとつの手段と捉える考え方に基づいて理論が立てられた。しかし、エイギン⁴Kenneth Aigen (2005) は、「音楽療法には他のそういった学問領域を頼りとせず、独自の理論があってもいいのではないか (p.47)」という考えを持っていた。このように、外部的な専門領域から引き出されたものとは際立ったコントラストをなしている音楽療法の理論の展開のひとつが、「音楽中心主義理論Music-centered theory」である。「音楽中心主義」とは、音楽療法において「音楽が中心にこななければならない」、すなわち音楽を手段として使うのではなく音楽をすること自体に治療的な意味がある、という音楽の力を強調する立場に立つ理論である。この理論は、近年、エイギンによってクローズアップされてきているが、エイギンが初めて提唱したのではなく、もともと存在していた。

ブルーシアは、音楽それ自体がセラピーであるということをMusic as therapyと言っており、即興を用いた音楽療法の中でのみMusic as therapyと言う用語を用いている。それに対してエイギン (2005) は、「即興に限らないのだ。すなわち、即興ということにとらわれることなく、幅広い音楽療法を考えていく。そういう意味においては、ブルーシアのMusic as therapyとい

⁴ケネス・エイギンは、音楽療法を医学的に取り入れながら研究を行っている。2005年までに自身の論文などにより、音楽中心主義音楽療法の理念を考え、提唱した。

う概念よりも広い意味だ(p.47)」と断っている。しかし、音楽中心主義の実践者は、音楽を治療において—Music in therapyというかたちより、Music as therapyとして—用いる傾向があることは事実であり、音楽中心主義音楽療法と治療的音楽療法であるMusic as therapyとは強い関係があると言われている。すなわち、治療として音楽というものを前面に出して強調していくのが音楽中心主義音楽療法ということである。

多くの音楽療法専門家が、音楽療法について「音楽療法における音楽とは・・・非音楽的な手段を意味する」と認めている中で、音楽中心主義音楽療法の作業目的は、音楽特有の表現や体験の達成であるとしている。この見解では、治療と音楽を別々に考えるものではない。音楽を表現したり体験したりすることは、音楽中心主義音楽療法の目的であるから、音楽を通じて達成されるものは他のどんな方法でも手に入れることができない。この見解に暗に含まれているのは、音楽を体験したり表現したりすることは、人々が治療を受ける原因に対処する妥当な方法として本来有益な人間活動であるということである。音楽への参加により、感情の抑制や、表現力、社会的能力を高められるということもあり得るが、それは医療処置の最も重要な位置づけではなく、二次的な効果として考えられている。それゆえに、音楽は必ずしも何かを達成するための手段ではない。例えば、エリオットDavid Elliot (1995) による「音楽をすること musicing」とは、音楽療法の目標のことである。このように、音楽の目標が音楽療法の妥当な活動の中心であるという考えは、音楽療法の手段と目的を合わせることを意味している。

2-2 音楽中心主義音楽療法におけるmeansとmedium

ここでは、音楽中心主義音楽療法を理解するにあたって、meansとmediumの関係について論じていきたい。

デューイ⁵ John Deweyが美学理論で専門用語として使用したように、音楽の体験は、感覚における経験の伝達手段と言われている。エイギン(2005)は、デューイが述べているmeansとmediumについて、次のように紹介している。(p.197)

必ずしもmeansがmedia (mediumの複数形) という訳ではない。Meansには2つの種類が存在する。ひとつは成し遂げられた外部のもの。もうひとつはそれらの中に内在的にとどまり、生み出された結果の中に取り上げられるものである・・・外部のあるいは正確にそれを称するところの単なるmeansは、たいていそれらに置き換えられる種のものである・・・しかし我々が“media”と述べたとたん、meansについて結果として組み込まれたものとして言及する。

芸術の一般的な趣旨を議論する際に、デューイはその役割の詳細な調査と特有の芸術作品の伝達手段の重要性に行き着いた。デューイは、mediumという言葉について、meansという言葉と同様に、手段の存在することを暗示していると述べている。二つの言葉は、間に起こるプロセスや活動、何かが生じるときの本質が存在することを示している。しかし、その二つの概念の間には重要な違いが存在する。人間活動では、media (mediumの複数形) と単なるmeansとは分けることができる。Mediumはその中に本来備わっているものを捜し求める体験であり、そして単なるmeansとは外部の目的への道具である。デューイは、単に試験に合格したくて勉強している生徒と、手段の価値だけでなく学ぶことに意味があるとしている他の生徒とを比較した例を使用している。

エイギン(2005)は、デューイの考えをもとに、音楽中心主義における考え方について、

⁵ジョン・デューイ(1859年-1952年)、アメリカの20世紀前半を代表する哲学者、教育改革者、社会思想家。パース、ジェームズとならぶプラグマティズムを代表する思想家。

例を挙げながら次のように述べている。(p.57)

我々は仕事へ行くために電車に乗り、どこかに旅行することと、山にハイキングへいくような楽しみのために旅行することとの違いを考えることもできる。前者の例において、私たちの旅は仕事へ行く目的のための手段meansであり、もしすぐに職場へ移動出来るならば手段meansなくしてもうまくいくだろう。ハイキングの例では、旅すること自体が私たちの動機であり目標であるため、旅なしで喜んでそれをする道理はないだろう。

音楽中心主義の考えでは、音楽とは体験の媒介mediumである。それは欠かすことのできない必要不可欠なものである。このような考えでは、音楽の体験は、仕事のために行く必要のある旅よりも、山にハイキングへいくというような旅のほうがより類似している。ハイキングの例では旅自体に活動の中心があるため、旅なしではうまくいかないということと同様に、音楽中心主義の作業では音楽体験自体も活動の中心であるためそれなくしてはうまくいくことはないだろう。

それゆえ、音楽中心主義における音楽に関していうと、手段meansと目的の調和が存在することになる。

これは一般的な美的体験⁶の場合に類似しており、そして音楽中心主義における美的関心⁷を説明するのに役立っている。

また、エイギン (2005) は、ギャレットRudy Garredの考えを紹介しつつ、次のようにも述べている。(p.124)

ルディ・ギャレット (2004) は、音楽中心主義音楽療法の理念は経験的媒介mediumとしての音楽の創造を必要とすることを認めている。

手段meansと目的の理論的な(純粹)論理は、組み立てられた目的と適応された手段の内的関係を全く前提にしていない。むしろこれらは、引き離された原理である。これは、もしあなたが固有の本質を備えた音楽に出会わないとしても、その時実際に完全に有益な効果を得ることができるだろうかという問題を引き起こすことになる。例えば、あなたは概して自分の社会的な技能を進展させようとは考えず、その後、これらの活動における興味に関係なく、オーケストラや聖歌隊に参加するでしょう。あなたはこれらのうちどれにも参加してよく、その結果そのような有益なものを得ることができる。もしあなたが音楽の活動にそれほど関心がないなら、ほとんどそれに関係する完全にはっきりとした利益を得ることを期待できないだろう。手段meansと目的の理論的な(純粹)論理は、利益を結果として生じる媒介mediumの質を欠くと、原理を他の方向に向けがちである。音楽療法の患者たちにとって、主な動機は音楽活動自体に関係するであろう。そして、もしそれがなければ音楽活動にともなう機能の改善をほとんど期待できないだろう。

このように、ギャレットにとって音楽療法に参加するためにその自発性や熱意を説明することが、音楽活動や体験に対する患者の動機である。そして音楽に対するこの動機は、ただ音楽療法の患者を得る役目をするのではなく、むしろ実際にその内部に重要な説明的性質を含んでいる。この考えは、患者の音楽療法での体験が本来音楽的なものであるとき、この事実は治療方法の有効性に対して説明を加えなければならないと提案している。

⁶ デューイが美学の特徴だと定義しているもの

⁷ 導かれたイメージと音楽について考えてみると、高い美的質の音楽が選択されている。ノードフとロビンズの働きについて考えてみると、音楽の美的質は臨床の過程と直接関係がある。そしてリーLeeの音楽中心主義アプローチは美的音楽療法と呼ばれている。

音楽療法の一例では、患者のmusicing⁸は、もっと音楽体験により深く関わり音楽体験をすべてとりまくまで、手段meansの状態である。

ノードフーロビンス音楽療法⁹—治療専門家たちが高度な経験に基づく利益をもたらすために患者の音楽への参加を広め、進展させ、識別する方法—は、この最初の事例である。それは医学的な音楽の才能の芸術である。即興で行われる医学的で音楽的な作業は、患者の表現や楽しみのための媒介mediumと、同時に音楽的能力の高い表現力や伝達能力を発達させるための手段meansの両方である。

厳密に言うと、この例は単なる手段meansと媒介mediumとは二分されたものではないという事実を強調している。これについて、エイギン(2005)は次のように述べている。(p.58)

デューイのコンセプトの提示は、あるものが手段meansと媒介mediumの両方としての機能を果たすことを妨げてはいない。Mediumとは、何かあるもののための媒介mediumである。それは、何かによって現れた趣旨や過程や実在するものであり、このようにそれは手段meansと類似している。媒介mediumとして何かを認めることは、手段meansの概念を正式に解決してはいない。それは、何が手段means自体の内にある内的な立場への手段meansの外的な目的とみなされているかを捜し出す。

その例として、エイギン(2005)は次のことを挙げている。(p.60)

学ぶことを喜んで受け入れるような学生は、高い学位を得る意志もまた持っているかもしれない。旅行者は、山を歩くことは明確な心臓や血管の健康の恩恵を得られるという事実喜びを得られるだろう。しかし、これらの活動が経験の媒介mediaだとみなされている理由は、これらの二次的な効果が単なる活動を始めるための唯一で主な理由でないことである。同様に、音楽中心主義音楽療法は、実際には非音楽的であるかまたは音楽経験の単独の方法とは無関係かのどちらか多くの分野の恩恵に結びつくことができる。しかしながら、ハイキングや教育の例がそうであると同様に、この意見は音楽療法における経験の媒介mediumとしての音楽の根本的概念であることを無効にすることはない。

3 音楽中心主義音楽療法の位置づけ

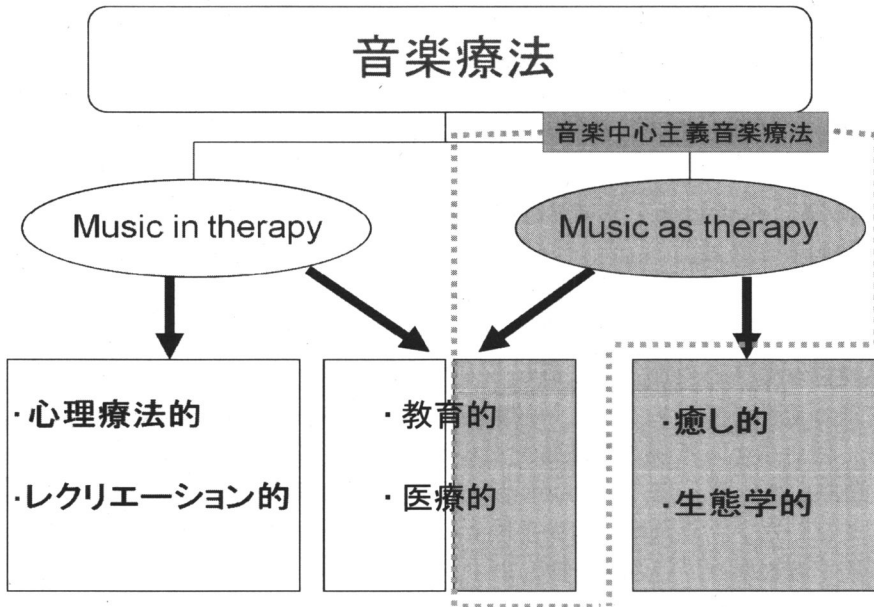
筆者は、エイギンが述べているように音楽すること自体を目的に置き、音楽を体験の媒介として、音楽科教育に音楽中心主義音楽療法を取り入れていきたいと考えている。

これまでに、広い意味を持つ音楽療法をブルーシアの考えに基づいて哲学別分類と領域別分類の領域別に分けて述べてきた。これらをもとに、筆者は音楽中心主義音楽療法を次の図3のように位置づけた。

まず、前述の通り、音楽療法は哲学的分類によってMusic in therapyとMusic as therapyとに分かれる。そして、そこに領域別分類における各領域を当てはめる。すると、Music in therapyには心理療法的領域とレクリエーション的領域が入ると考えられる。Music as therapyには、癒しの領域と生態学的領域が入ると考えられる。Music in therapyとMusic as therapyの両方に含まれるのは、教育的領域と医療的領域だと考えられる。この図3に音楽中心主義音楽療法を位置づけると、まずMusic as therapyの分類に含まれる。

⁸医学的に有益な体験の手段medium

⁹ノードフP. NordoffとロビンスC. Robbinsによって設立された音楽療法セミナー。



【図3】音楽療法の中での音楽中心主義音楽療法の位置づけ

音楽中心主義音楽療法がMusic as therapyに分類されるのは、次のような理由がある。(p.56)

多くの実践者は、音楽療法について非音楽的な目標を達成するために音楽を使用することと定義し、音楽教育や、音楽鑑賞や、音楽演奏から区別している。一般的な音楽療法における典型的な目標には、衝動の統制、社会的スキルの向上、情動的な表現力の向上、心理的葛藤の解決、注意力の向上などが挙げられる。

このように、音楽療法において音楽を目標達成のための一つ的手段として用いているのが現状なのである。しかし、こういった目標や実践を見て、エイギン(2005)のように「多くの音楽療法では、音楽の力を強調していない(p.55)」といった意見が現れた。エイギン(2005)は、「音楽は補助的なものではなくて、音楽自体がセラピーで重要な役割を果たす、そういうふうでなければ音楽療法とは言えないのではないか (p.59)」といった考えから、音楽の美しさを感じたり、音楽の技能を習得していったりすることなど、音楽教育や音楽鑑賞を行い、音楽的経験を培うことで、非音楽的なこと¹⁰が向上していく音楽中心主義音楽療法を提唱した。すなわち、音楽中心主義音楽療法の目標は、音楽に特異的で独特な経験と表現の達成であるとされているのである。

このような主張は、音楽を核として持っていなければならない。しかし、多くの音楽療法では、音楽の力を強調せず、音楽を道具として扱っている傾向がある。リハビリテーションのための手段として使うか、音楽経験それ自体ということではなく、他の治療の中で音楽を補助的に使っていくという方法がある一方で、もっと音楽自体の持つ治療的な働きというものを強調していこうとされている。その主張によると、心理療法や教育、医学などの何らかの治療的、教育的、リハビリ的な介入において、音楽を補助的な手段として用いるのは本来の音楽療法ではない。

¹⁰非音楽的効果を二次元的な効果とし、治療的介入の一次的な焦点ではないとしている。

音楽中心主義音楽療法とは、音楽を目的のための手段として使用するのではなく、音楽すること自体を目的とし、音楽技能の習得や音楽経験の増加などを図ることである。その音楽することを媒介とし、二次的効果が結果的に見られる。それゆえ、領域別分類として音楽中心主義音楽療法を捉えると、教育と医療とが融合していると言えるだろう。

したがって、図3の分類図に音楽中心主義音楽療法を当てはめるならば、音楽中心主義音楽療法は教育と医療の融合であると考えられるため、「治療としてMusic as therapy」の中の教育的・医療的分類に含まれると考えられる。

4 教育的立場でのmeansとmedium

4-1 エイギンによる教育的立場でのmeansとmedium

エイギン（2005）は、これまで述べてきたような考えを教育的立場でも応用しようと考え、教育の場における音楽療法の有用性について次のように述べている。（p.60）

少し教育の例を考えてみよう。なぜなら療法の場面と同様に専門的な関係の存在を含んだ2つの当事者が存在するからである。教師にとって、教室という場面は教師が生計を立てるためか生徒が将来生計を立てていくためにより備えるかという、単なる手段meansとして考えられている。または、教師が生徒とのふれあいから本質的な満足感を得るか、生徒が教師の努める範囲内で学ぶことの愛情を育むか、経験の手段mediumとしてのふれあいとみなすことが可能である。同様に、上記のようにその場面は生徒の客観性から手段meansか媒介mediumかのどちらかを体験することができる。

また、エイギンは音楽療法を使用する際に注意すべき点についても述べている。それと同時に、非音楽中心主義音楽療法は専門的で実用的な場面では認められず、患者と専門家の関係を重視する場合は音楽中心主義音楽療法でなければならないことを言及している。（p.61）

音楽療法の立ち位置において音楽は手段meansか媒介mediumなのかについて考える際、その決定がだれのためになされたものであるかを明確に述べるべきである。患者の経験は完全に自己正当化のための楽しみの媒介mediumとしての音楽だけれども、セラピストたちは、まったく非音楽中心主義であるかもしれないし、完全に非音楽的な目的を成し遂げるための単なる方法として音楽体験を考えだす可能性がある。非音楽中心主義の利用は、そのような場面では認められるのだろうか。

その答えは、あなたがその主義の役割として信じるものによる。それがどれほど問題の状況を模範とするかは気にせず専門家に発見する方策を与えれば、患者の体験と専門家たちの場面の解釈の間の乖離がどこにあるかは問題ではない。一方では、原理が重要な部分において患者の経験に合うべきという、専門的で認識的で実的な原因を信じるなら、非音楽中心主義の利用は認められないだろう。

これまで述べてきたように、音楽の活動そのものを目的とし、結果として治療（集中力の高まりなど）の効果を期待するという音楽中心主義音楽療法は、どのように音楽科の授業に適用できるであろうか。

4-2 音楽科教育におけるmeansとmedium

これまで述べてきたことを踏まえ、音楽中心主義音楽療法において手段と目的をどのように捉えるべきか、まとめてみたい。

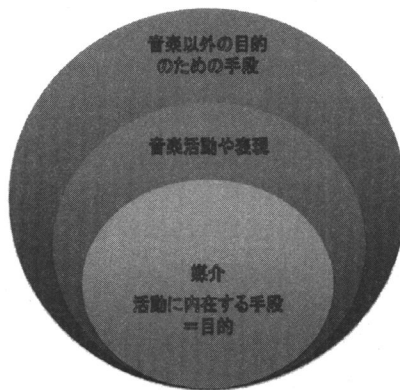
従来の音楽療法は、音楽はあくまで治療のための手段だった。次の表2に示しているように、音楽中心主義音楽療法における目的は、活動に内在する「手段」である。また、音楽中心主義

の考えでは、音楽とは体験の媒介mediumである。それは、欠かすことのできない必要不可欠なものである。

【表2】 MeansとMedium

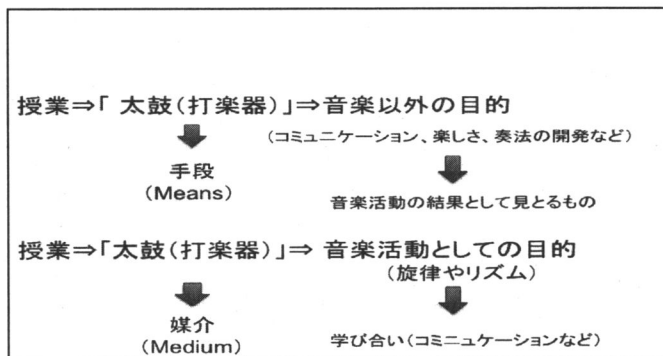
	目的	種類
means	外部の目的	手段、道具
medium	手段＝目的 活動そのもの	媒介

音楽科における手段と目的の関係を図に示すと、次の図4のようになる。



【図4】 音楽科における手段と目的

例えば、「皆でリズムに合わせて太鼓をたたくことで、感性やコミュニケーションを高める授業」という音楽科の授業を想定してみよう。



【図5】 Mediumとしての授業

図5に示したように、「楽しさやコミュニケーション」を目的にすると、音楽活動やツール(打楽器)は手段になる。一方、「音楽の活動そのもの」を目的にすること、すなわち「音楽特有の体験や表現の達成」を目的とすると、太鼓は「活動や経験の媒介medium」となる。

Mediumとはそれらの中に内在的にとどまり、生み出された結果の中に意味を取り上げられるものである。この例では、活動の結果に「感性やコミュニケーション」の意味を読み取ることが望ましいのではないかと考えられる。

おわりに

筆者は、特別支援学校において音楽技能の習得を目指しながら子どもたちの生活の質の向上を図る音楽科の授業を実践するにあたり、「音楽中心主義音楽療法」の導入を目指している。本論文は、音楽療法の定義を分類した上で、「音楽中心主義音楽療法」の理論とその位置づけを明らかにした。また、音楽科の授業にどのように適用できるか、meansとmediumの関係をもとに言及した。

次の「特別支援学校における音楽授業の研究（2）—音楽中心主義音楽療法を導入した実践構想—」においては、特別支援学校における音楽の授業を対象にフィールドワークで理解を深めた上で、音楽中心主義音楽療法を導入した音楽科の授業の在り方について具体的に論じていく。

引用・参考文献

- ・梅田裕子（2007）「日本における音楽療法の『療法』という概念についての一考察」『大阪音楽大学研究紀要』46巻大阪音楽大学
- ・丸山忠璋（2002）『療法的音楽活動のすすめ 明日の教育と福祉のために』春秋社
- ・林庸二（2006）「第3回 Kenneth Aigenによる音楽中心主義音楽療法について」『音楽研究所年報』第20巻国立芸術大学
- ・Aigen,K（2005）*Music-centered music therapy*, Barcelona Pub.
- ・Bruscia,K.E.（1987）*Improvisational models of music therapy*, Charles CThomas Pud. [邦訳：ブルーシア（1999）『即興音楽療法の諸理論（上）』生野里花訳 人間と歴史社]
- ・Bruscia,K.E.（2001）*Defining music therapy*, Barcelona. [邦訳：ブルーシア（2003）『音楽療法を定義する』生野里花訳 東海大学出版会]
- ・Davis,W.B. Gfeller,K.E.（1992）*An Introduction To Music Therapy Theory and Practice*. Wm.C.Brown Publishers. [邦訳（1997）『音楽療法入門上』一麦出版社]